

B-6

中古日本語における動詞とアスペクト助動詞との接続相補性の再評価

かどた ひろし
廉田 浩

1. まえがき

日本語（中央語または共通語）のアスペクト（Asp）主要標識を通時的に見た場合、中古日本語では助動詞ツ・ヌ・タリ・リの4種/4形式が存在するのに対し、近現代日本語では、テンスとの共用助動詞タ1種と、文法化した～テイル等の2形式に収束している。中古のAsp助動詞各々の文法的意味機能に関しては、既に多くの研究があり、特に(ア)「ツとヌの使い分け」や(イ)「タリとリの関係」については詳細な分析もなされているが、Asp体系内での全要素の相互関係と、その結果としてAsp助動詞がタリ（更に文法化した助動詞タ）一種に収束していった過程などについては、必ずしも十分な分析がなされていないように思われる。

一般に、ある語の意味や機能を確定するために、「それがどのようなコンテキストで使われているか」が重要であることが従来から言われているが、近年の認知脳科学の研究結果からは、特に抽象語の意味機能認知の過程でその重要性がより高いことが推定されている。日本語の助詞や助動詞といった文法語は抽象語の一種であり、それらの前置・上接語（助動詞であれば上接動詞）は最も影響力があるコンテキストである。従って、上述の(ア)(イ)関連の先行研究においても、上接動詞集合の特徴分類（例えば動詞の他動性や活用型）によって助動詞の分析をおこなっているものが多いのは至極当然のことと考えられる。但し、先行研究では、助動詞の使い分け等の標識として「動詞との接続関係」を表面的に利用しているものがほとんどである。

本稿では、この「助動詞と上接動詞との接続関係」、特に相補的な接続関係そのものについて考察し、それがAsp体系内の助動詞の相互関係にどのような影響を与えるかを検討する。更に、このような相補的な性質が各助動詞間でどの程度存在するかということ（相補性）を定量的に示す評価指標を提案し、実際日本語歴史コーパスを使って中古日本語におけるAsp助動詞と上接動詞の統計を取り、各助動詞間の相補性を定量的に評価する。この結果と、前述の相補性に関する一般的な考察とを総合して、先行研究では、必ずしも定説が確立されていなかった、中古日本語Asp助動詞体系内の相互関係や上接動詞の活用型との関係、および、タリに収束する通時変化の過程の推定を行う。

2. 助動詞と上接動詞との接続に関する助動詞間の完全相補性の定義およびその解釈

大雑把な定義として、接続親和性とは、「助動詞ツ・ヌ・タリ・リ等がどのような動詞部分集合に接続し易いか」を表し、その部分集合要素との共起出現数リストを各助動詞の親和性プロフィールと呼ぶことにする。また、二つの助動詞間で親和性プロフィールの共通部分が少ない場合、これらの助動詞は「相補的關係である」または「相補性がある」とする。古典Asp助動詞のなかでも、ツとヌの使い分けに関する先行研究は多くなされていて、その上接動詞の相補性でAsp的機能を区別することが行われてきた。(例えば、金水(2011)) 定量的な議論は次節以降で行くことにして、まず本節ではこのような相補性の意味を再吟味してみる。

同じ文法範疇の助動詞xとyがあったとし、それぞれの上接動詞部分集合が $\{a_i\}$ 、 $\{b_j\}$ とする。更に、任意の a_i と b_j が異なる場合、即ち集合 $\{a_i\}$ と集合 $\{b_j\}$ が共通部分を持たない場合「助動詞xとyは、上接動詞に関して完全相補的である」と定義する。即ち、

$$(1) \quad \dots \{a_1/a_2/\dots/a_m\} x \dots \quad \dots \{b_1/b_2/\dots/b_n\} y \dots \quad \text{集合}\{a_i\} \cap \text{集合}\{b_j\} = \phi \Rightarrow \text{完全相補的}$$

次に、実際の文脈の中でxやyを含む述語が表現する文法的（非語彙的）意味をそれぞれ、共通意味部分と、差異化意味部分に分けて考える。具体例で示すと、「助動詞ツとヌが上接動詞に関して完全相補的である」と仮定し（例えば山崎(1966)にあるように、実際はそうではないが）、「ツが有意志動詞に、ヌが無意志動詞に接続する」と仮定した場合、文法的意味の共通部分は「動作・作用の完了または完了後の状態を示す」で、差異部分は「(ツ) 有意志動作の… / (ヌ) 無意志動作・作用の…」になる。そして従来は、共通部分と各々の差異部分を合わせたものが、各々の助動詞に内在する文法的意味と解釈されてきたが、差異部分の内かなり部分は上接動詞の意味の一部を引き継いだものであり、xやyに本来内在している意味は共通部分に近いものになる。つまり、助動詞x,yの文法的意味の差異部分は上接動詞によって推定できるものである。発話を情報の伝達手段と考えると、助動詞xとyを使って伝えたい情報は、それらの文法的意味の共通部分に近い

意味をもつ助動詞 z が存在すれば、それを使うことによって、理論的には確実に伝達することができる。以上のことをまとめると下記のようになる。

- (2) 述語部の伝達情報 (…, x, y, …) の助動詞体系の場合 ⇒ (…, z, …) の助動詞体系の場合
 成り・ぬ [α_i+α_c+γ] … a_i[α_i+α_c]x[(α_c)+γ] …。 … a_i[α_i+α_c]z[γ] …。
 なし・つ [β_j+β_c+γ] … b_j[β_j+β_c]y[(β_c)+γ] …。 … b_j[β_j+β_c]z[γ] …。
 但し、[]: 意味機能情報内容、α_i, β_j: 動詞 a_i, b_j がもつ個別語彙の意味、α_c, β_c: 動詞集合 {a_i}, {b_j} が共通にもつ意味機能、γ: 助動詞 x, y が共通にもつ文法的意味機能

一方、相補性がない助動詞 x, u の文法的意味機能の差異を上接動詞によって推定することは一般に困難である。即ち、差異部分は上接動詞と無関係で、各々が純粋に x, u の内在的意味になる。従って x, u 間の実質的な意味機能の違いは大きくなる。

また、(x, y) を (z) に置き換え可能という議論は、取り敢えず理論的・形式的には可能ということで、実際の言語体系で起こり得るかということは、別途確認する必要がある。このとき一つの傍証となるのが、前節でのべた、最近の脳科学の研究成果 (Context Availability Model: Kemmerer(2015)等) である。即ち、大脳内での発話生成・理解作業の内、語の意味機能の認知過程ではその語の内在的意味機能の検索 (辞書検索) が行われるだけでなく、語周辺のコンテキストによって意味機能認知が行われる。抽象語では、特に後者の影響が大きいと推定される。以上の相補性に関する議論をまとめると、

- (3) 完全相補的な助動詞対 (x, y) では、内在する文法的意味の違いはそれほど小さくなく、かつ一つの共通助動詞(z)によって置き換え可能。即ち、文法体系としては、助動詞対 (x, y) は冗長な存在となる。逆に相補性がない場合、内在する文法的意味の違いは大きく、共通助動詞による置き換えも不可。

3. 親和ベクトルと相補性定量化

表1 Asp 助動詞と上接動詞共起出現数例 (平安・四段動詞)

実際の中古日本語では、二つの Asp 助動詞間で完全相補的な場合はなく、「無関係状態から完全相補関係」の間のどこかに位置している。このような相互関係をあらためて「相補性」と呼ぶことにし、しかもこれを定量的に評価できるような評価手法を考える。なお、本稿のデータは全て日本語歴史コーパスから取得した。

まず前節で導入した出現度数分布「親和性プロフィール」をそのまま使って、助動詞間の相補性の評価を行うのが適切かどうかを吟味してみる。表1は、平安時代資料地の文中の四段型動詞で各 Asp 助動詞に上接する共起出現頻度合計が上位20位までのものを示している。助動詞ツ・ヌ・タリ・リ (+ケリ・キ) の縦の列の数値

平安・地文・四段動詞(G)	TA助動詞出現数										Asp助動詞比率(%)			
	単語	全数	TA計	TA%	けり(u)	き(v)	つ(x)	ぬ(y)	たり(z)	り(w)	つ(x)	ぬ(y)	たり(z)	り(w)
gi (∈ G)	Ngi	NTgi	PTgi	Nugi	Nygi	Nxgi	Nygi	Nzgi	Nwgi	Pxgi	Pygi	Pzgi	Pwgi	
たまふ	13926	4695	33.7	815	415	152	656	30	2627	3.2	14.0	0.6	56.0	
なる	1462	860	58.8	159	32	0	619	44	6	0.0	72.0	5.1	0.7	
思ふ	4758	479	10.1	126	101	33	10	102	107	6.9	2.1	21.3	22.3	
思はず	2924	423	14.5	130	36	7	6	244	0	1.7	1.4	57.7	0.0	
いふ	1836	404	22.0	249	25	2	0	54	74	0.5	0.0	13.4	18.3	
あふ	430	258	60.0	26	1	0	22	77	132	0.0	8.5	29.8	51.2	
言ふ	2705	233	8.6	61	54	23	0	76	19	9.9	0.0	32.6	8.2	
やる	790	210	26.6	86	9	36	0	69	10	17.1	0.0	32.9	4.8	
よむ	325	200	61.5	76	1	1	0	36	86	0.5	0.0	18.0	43.0	
立つ	761	183	24.0	21	7	1	59	14	81	0.5	32.2	7.7	44.3	
入る	711	173	24.3	23	8	2	88	49	3	1.2	50.9	28.3	1.7	
やむ	198	158	79.8	19	16	0	116	7	0	0.0	73.4	4.4	0.0	
のたまふ	1569	157	10.0	46	37	9	0	1	64	5.7	0.0	0.6	40.8	
参る	815	144	17.7	4	5	1	36	49	49	0.7	25.0	34.0	34.0	
知る	973	129	13.3	21	9	0	22	49	28	0.0	17.1	38.0	21.7	
おはします	481	120	24.9	52	27	2	14	25	0	1.7	11.7	20.8	0.0	
臥す	374	114	30.5	6	2	0	21	78	7	0.0	18.4	68.4	6.1	
書く	700	98	14.0	12	0	5	0	69	12	5.1	0.0	70.4	12.2	
まゐる	391	89	22.8	10	5	2	9	43	20	2.2	10.1	48.3	22.5	
たてまつる	1158	88	7.6	13	20	24	4	18	9	27.3	4.5	20.5	10.2	

(TA計が上位20位まで)

出現数平均	15.0	84.1	56.7	166.7
-------	------	------	------	-------

比率平均	4.2	17.1	27.6	19.9
------	-----	------	------	------

N_{xgi}, N_{ygi}, N_{zgi}, N_{wgi} が各々の親和性プロフィールの一部になるが、ここに現れた数値、例えば N_{xgi} は次の3要因の積によって決まると考えられる。

- (4) N_{xgi}[Asp 助動詞 x と上接動詞 g_i 共起数] = N_{gi}[g_i 出現数] × P_{Tgi}[g_i の TA 表現割合] × P_{xgi}[g_i-x の純親和性]
 但し、N_{Tgi} = Σ_j (N_{jgi}) ; j = x, y, z, w, u, v として、P_{Tgi} = N_{Tgi} / N_{gi} P_{xgi} = N_{xgi} / N_{Tgi} (TA: Tense & Aspect)

上記右辺の第1項 N_{gi} は助動詞 x とは無関係に動詞 g_i の特徴で決まり、第2項 P_{Tgi} も概ね同様であり、純粋に動詞 g_i と助動詞 x の親和性を表すのは第3項 P_{xgi} となる。表1の右側に P_{xgi}, P_{ygi}, P_{zgi}, P_{wgi} の値を示す。

従って、助動詞間の相補性を評価するには、N_{xgi} の分布 (親和性プロフィール) ではなく、P_{xgi} の分布を使用するのが適切と考えられる。更に、対応する二つの分布間の依存関係を定量的に評価する標準的統計手法として、相関係数があり (薩摩(1989))、第1の分布 {f_i} に対して第2の分布が、同一極性1次変換 a{f_i} + b; (a>0) であれば、相関係数 ρ_{1,2} = +1、逆極性 (a<0) であれば、ρ_{1,2} = -1、全く独立無関係であれば、ρ_{1,2} = 0、

その他の場合、 $-1 < \rho_{1,2} < +1$ という性質があるので、二つの分布が相補的な場合、 ρ は負で -1 に近い値になると考えられる。但し、前節で定義した完全相補的な場合に -1 ではなく、概ね $-0.7 \sim -1$ になることが数値実験で確認されている。また相補性の従来概念では、上接動詞として助動詞 x, y 何れに対しても出現頻度が低いものは、対象としないので、これに整合させるため、 $P_{xgi}, P_{ygi} \ll 1$ の場合、これらの積項は無視する。 $P_{xgi}, P_{ygi}, P_{zgi}, P_{wgi}$ 間の上記の修正を加えた「変形相関係数」を計算するため、各分布の1次元変換を次のように行い、その結果を親和性ベクトル $F_{x/y/z/wG} = \{F_{x/y/z/wgi}\}; gi \in G$ と呼ぶ。そして、助動詞間の相補性指標としての変形相関係数は、親和性ベクトルの内積によって求める。具体的には以下ようになる。

ある文法範疇 T の助動詞 $\{x, y, z, w, u, v\}$ と、ある動詞グループ $G = \{gi\}$ で、例えば、助動詞 x と上接動詞 gi の共起が N_{xgi} 回出現したとすると、次式で与えられる割合 $P_{xgi} = N_{xgi} / N_{Tgi}$ ($N_{Tgi} = N_{xgi} + N_{ygi} + N_{zgi} + N_{wgi} + N_{ug} + N_{vg}$) は、動詞 gi と助動詞 x との個別の親和性を定量的に表している。動詞グループ G の中で N_{Tgi} が一定数以上のもの(全数 n 個)から分布 $P_{xG} = \{P_{xg1}, P_{xg2} \dots P_{xgn}\}$ を形成し、その平均値 μ_{xG} と標準偏差 σ_{xG} を使ってこの分布を規格化し、それをベクトルと見なしたものを助動詞 x とグループ G 間の親和性ベクトル F_{xG} と定義する。

$$(5) \text{ 親和性ベクトル: } F_{xG} = \{F_{xgi}\} \quad F_{xgi} = (P_{xgi} - \mu_{xG}) / \sqrt{n \cdot \sigma_{xG}}; i = 1 \sim n$$

$$\text{助動詞 } x, y \text{ の相補性 (動詞 } G): \rho_{xyG} = F_{xG} \cdot F_{yG} = \sum_i \{F_{xgi} \cdot F_{ygi}\}; i = 1 \sim n (P_{xgi}, P_{ygi} \ll 1 \text{ の時無視)}$$

4. 助動詞間相補性定量評価

動詞を次の8グループに分類し、各 Asp 助動詞と各グループ中の上接動詞との共起出現数を、日本語歴史コーパスを使って計測し、TA 助動詞総和: N_{Tgi} が 18 以上のものから、表 2 のような各助動詞に対する親和性プロフィールをまず作成する。(変格型は、見出し語数が少なく、詳細な分析が必要なため本稿では省略する)

- (6) 動詞グループ分類 [時代区分] 1.平安、 2.鎌倉
 (全体 8 グループ) [文種] A.地の文、 B.会話文
 [活用例] I.四段型、 II.下二段型・上二段型

表 2 (I) 四段型動詞グループに対する各助動詞の親和性プロフィール (nVf: (5)式中の 'n' に相当)

1A 平安・地の文					1B 平安・会話					2A 鎌倉・地の文					2B 鎌倉・会話								
平安・地文 nVf/NT = 89/744 (Nth=18)					平安・会話 nVf/NT = 34/458 (Nth=18)					鎌倉・地文 nVf/NT = 138/996 (Nth=18)					鎌倉・会話 nVf/NT = 37/451 (Nth=18)								
四段動詞	TA計	つ	ぬ	たりり	四段動詞	TA計	つ	ぬ	たりり	四段動詞	TA計	つ	ぬ	たりり	四段動詞	TA計	つ	ぬ	たりり				
たまふ	4695	152	656	30	2627	たまふ	2732	156	407	32	992	給ふ	1216	29	187	65	237	候ふ	356	141	79	2	1
なる	860	0	619	44	6	なる	493	3	353	25	1	云ふ	722	26	2	15	12	候ふ	356	141	79	2	1
思ふ	479	33	10	102	107	おはします	270	12	24	39	1	行く	567	4	173	88	0	参る	132	23	17	68	9
思す	423	7	6	244	0	申す	217	29	0	22	0	成る	512	3	337	25	13	奉る	131	18	6	45	26
いふ	404	2	0	54	74	思ふ	180	53	10	27	21	入る	491	6	240	115	6	成る	130	4	94	17	5
あふ	258	0	22	77	132	たてまつる	139	33	18	28	1	いふ	479	13	2	18	63	思ふ	128	69	1	9	2
言ふ	233	23	0	76	19	思す	136	1	8	73	0	申す	476	5	5	40	3	知る	115	0	16	63	28
やる	210	36	0	69	10	のたまふ	107	17	1	0	25	思ふ	458	27	4	93	23	来る	112	3	7	1	90
よむ	200	1	0	36	86	言ふ	96	28	0	16	0	なる	335	2	199	19	9	行く	93	6	36	23	0
立つ	183	1	59	14	81	さぶらふ	75	23	9	1	0	返る	332	2	193	19	0	申す	85	27	4	26	2
入る	173	2	88	49	3	知る	70	0	13	32	9	立つ	316	0	42	36	152	殺す	84	48	2	10	12
やむ	158	0	116	7	0	まゐる	58	6	12	24	3	去る	312	0	231	11	0	なる	83	4	62	7	4
のたまふ	157	9	0	1	64	まかる	58	4	27	7	1	参る	308	3	60	130	10	云ふ	78	39	0	2	0
参る	144	1	36	49	49	参る	54	11	16	14	2	思す	296	0	55	140	35	持つ	67	1	0	56	2
知る	129	0	22	49	28	おく	53	13	0	18	1	奉る	280	37	4	38	56	入る	55	4	26	13	3
おはします	120	2	14	25	0	開く	53	9	0	6	0	知る	245	0	52	90	49	置く	54	8	0	32	1
臥す	114	0	21	78	7	やむ	49	0	35	1	0	止む	228	0	128	1	0	取る	54	20	2	21	4
書く	98	5	0	69	12	うけたまは	48	1	10	0	1	置く	224	40	1	108	9	開く	53	17	0	6	0
まゐる	89	2	9	43	20	思し召す	42	6	0	13	0	合ふ	210	2	10	92	65	返る	39	1	31	5	1
たてまつる	88	24	4	18	9	持つ	36	0	0	33	0	来る	170	3	37	3	93	立つ	38	1	12	10	9
わたる	84	6	6	14	32	なす	34	18	0	9	0	書く	168	1	0	79	47	去る	36	1	26	1	1
帰る	82	0	45	16	0	入る	33	1	18	6	0	語る	160	0	1	3	1	食ふ	34	20	0	8	0
なす	81	27	0	38	0	あふ	28	0	3	11	12	持つ	159	0	1	103	12	臥す	33	0	2	21	4
おく	76	12	1	33	0	奉る	27	4	1	9	3	問ふ	159	1	1	3	0	たまふ	33	1	10	6	0
つく	72	0	23	29	3	立つ	26	0	12	2	9	上る	154	1	47	24	1	造る	30	1	0	6	16
奉る	71	3	1	15	22	帰る	25	1	20	0	0	遣る	141	31	0	47	0	いふ	28	11	0	2	2
とまる	70	1	25	13	14	まさる	23	0	9	7	3	仕む	138	1	3	5	2	仕る	27	3	0	14	2
開く	68	7	0	15	1	置く	22	1	0	19	0	言ふ	132	4	7	24	12	さぶらふ	27	2	2	0	0
まさる	59	0	14	18	11	生く	22	0	0	0	22	取る	131	41	5	25	5	渡る	25	3	10	3	4
泣く	59	0	24	5	0	いふ	20	8	0	1	1	たまふ	129	2	32	19	9	御ます	25	3	6	7	0
かかる	54	0	4	34	13	たつ	20	0	12	0	1	渡る	121	1	30	6	10	おはします	25	2	5	7	0
出だす	54	5	0	39	5	過ぐす	19	12	0	3	0	出す	115	21	0	51	5	上る	23	4	8	5	2
乗る	52	1	17	24	3	つく	19	0	9	8	0	下る	113	0	29	12	4	止む	23	0	19	1	0
						にくなる	18	0	10	1	0							罷る	20	5	11	0	0
違ふ	18	0	6	6	6							当る	18	1	6	1	2	付く	19	0	5	11	0
満つ	18	0	3	15	0							産む	18	7	0	4	3	失ふ	19	9	0	3	2
生く	18	0	0	0	18							まさる	18	1	1	8	4	書く	18	1	0	10	2

表 2-(I)-1A, 2A については、それぞれ 34~86 位と 34~135 位を略する。(NT: TA 助動詞共起全動詞種数)

表3の結果および(7)の出現比率評価の結果をまとめたものを、表4に示す。表中「x」記号が多いほど相補性が強い。評価基準は表4の下部に示した。

全体の相補性強弱分布を概観する：

- (a) ツ・ヌ は 全般的に相補性があるが、特に会話部が強い。
- (b) ヌ・タリ は 上下二段型では強い相補性があるが、四段型では弱い。
- (c) ツ・タリ は 特に平安期に地の文(強)と会話部(弱)との間で相補性の差が大きい。
- (d) ツ・ヌ・タリ・リ は 全般的に相補性が弱い。特に鎌倉期は相補性がない。
- (e) ツ・ヌ・タリ で 鎌倉期に相補性が幾分強くなる傾向がある。

このような評価結果から、どのようなことが言えるかを次節で検討する。

5. 中古日本語の Asp 助動詞体系とその通時変化要因の推定

まず考察の前提として、前述の(3)記述内容を用いる。この内容は次のように言い換えることができる。

- (3)' Asp 助動詞対(x,y)の各内在的な意味機能の範囲と中心位置を仮定すると、x-yの相補性が強い場合は、両方の意味機能範囲の重複部分が多く、中心位置も近くにある。相補性が弱い場合はその逆である。

この前提と表4の結果、および先行研究(例えば鈴木(1999))なども参照し、大胆な簡略化を行い、Asp 助動詞系の意味機能関係を図式化すると、図1のような模式図の作成が可能である。

更に、今回の助動詞間の相補性の分析から分かった興味深い現象として、各助動詞の意味機能の相互関係が、単に従来言われている通り、時代とともに変化だけでなく、時代が同じでもコンテキストによっても変化するという事象があげられる。前節(a)-(e)により、具体的に検証する。但し、ここでは、助動詞ヌが時代やコンテキスト変化に対して比較的安定で不動の位置にあると仮定して説明する。

(b)は上接動詞が四段か上下二段かによって、タリの意味機能の位置や範囲が大きく異なる現象である。四段動詞に対しては、タリの意味機能範囲がヌから離れ、かつ継続側へ移動するためと推定される。そしてこの移動は、四段型動詞と上下二段型動詞の終止形の持つアスペクト特性の違いに起因するものと考えられる。即ち、上下二段動詞の終止形は動作の進行継続相も表すことができ、連体形は完成相を表すというように、役割分担がはっきりしているのに対して

(廉田(2017))、四段動詞では終止形と連体形が同一のため、進行継続相の表現力が劣化している見なされ、これを補うために、タリが使われ、四段動詞に下接した場合、その意味機能が継続側に移動したのではないかと考えられる。

更にこの移動によって、上下二段型に下接した場合のタリの意味機能範囲に空白領域ができるため、そこを埋めるために助動詞リが存在しているのではないかと考えられる。図1では必ずしも適切に表現されていないが、前節(d)の内容は、助動詞リの意味機能範囲が、他の助動詞ツ・ヌ・タリの範囲とあまり重複しない空白領域を埋めるような場所に存在していることを表していると考えられる。

表4 相補性評価のまとめ

助動詞 組合せ	評価 方法	平安				鎌倉			
		地の文		会話		地の文		会話	
		四段	上下二	四段	上下二	四段	上下二	四段	上下二
ツ・ヌ	相関	xx	x	xxx	xxxx	xx	x	xx	xxx
	出現比	x	x						
ツ・タリ	相関							x	x
	出現比	xxx	xxx			x	xxx		
ヌ・タリ	相関	x	xxxx	xx	xxx			xxx	x
	出現比								
ツ・リ	相関	x		x					
	出現比								
ヌ・リ	相関			x					
	出現比								
タリ・リ	相関	x							
	出現比								

相関	> -0.3	> -0.4	> -0.5	> -0.6	< -0.6
記号	(無)	x	xx	xxx	xxxx
出現比	< 0.2	< 0.3	< 0.7	< 0.8	> 0.8
記号	xxx	x	(無)	x	xxx

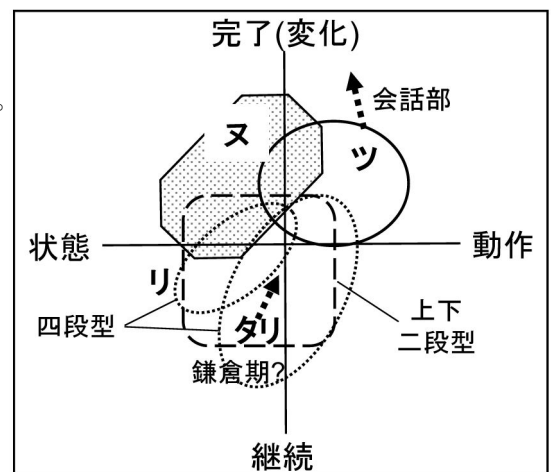


図1 Asp 助動詞の意味機能関係の模式図

なお、中世日本語の体系変化により、進行継続相表現は、～テ+補助動詞(イル等) に変化したため、タリの意味機能範囲の移動は必要なくなり、助動詞リも存在理由がなくなり消滅していったと推定される。

(a) (c) はコンテキストとしての文種が地の文か会話かによって、助動詞ツの意味機能範囲が変化することを表していると考えられる。この現象は既に先行研究(鈴木(1999))でも指摘されているが、ここでは定量的な分析によりこの現象を検出したことになる。ツの意味機能範囲の移動方向は、タリから遠ざかり、又少し近づく方向なので、図1に示したように上向きの「完了」方向で、会話部の完了強調表現等で多用されたのではないかと考えられる。

最後に (e) は、中世以降の Asp 助動詞の中で、タリが他の助動詞に置き換わっていった現象の予兆を表すものと考えられる。タリの意味機能範囲は、又ヤツに近づき、重複領域が増加し、同時に体系内の冗長性も増加する。一般に冗長な体系では、それを支持する言語社会が消滅すると、その冗長部分も解消されることが多いと推定され、実際に中世日本語でもそのような事象が起き、助動詞としてはタリ(そして更に助動詞タ)一語に収束していったのではないかと考えられる。但し、中古日本語の Asp 助動詞の意味機能範囲の全体が助動詞タリに継承されている訳ではない。例えば、前述の会話部の助動詞ツによる完了強調表現などは恐らく別の迂言的表現によって中世末以降は実現されているのではないかと考えられる。

6. まとめ

中古日本語における Asp 助動詞、ツ、又、タリ、リの体系とその通時変化を上接動詞群との接続関係の観点から分析した。具体的には、各助動詞がどの動詞に下接し易いか(=親和性プロフィール・親和性ベクトル)を求め、二つの助動詞間で親和性プロフィールが逆転しているか(=相補性)を分布の相関係数で定量化する方法を提案し、歴史コーパスを使い各助動詞間の相補性を計算した。同時に、「相補性」自身の意味するところも考察し、次のような結果を得た。

- (1) 相補的な助動詞対では、各助動詞自身に内在する文法的意味の違いは大きくなく、かつ一つの共通助動詞によって置き換え可能。即ち、文法体系としてこの助動詞対は冗長な存在である。
- (2) 中古 Asp 助動詞中、タリは他の助動詞との相補性が高い。つまり中古の Asp 助動詞体系は冗長性が高く、タリに一本化する素地が元々あった。中世に実際その変化が起きたと推定される。
- (3) 助動詞リの上接動詞活用型が偏っている点についても、相補性の観点から説明を試みた。

今後は、助動詞ケリ・キを含む TA 助動詞体系全体で相補性を検証し、過去・回想を含む TA 全体として助動詞タリに収束していった現象を分析していく予定である。また、収束時に最も安定していた助動詞又ではなく、何故タリに収束していったのかということに関しても考察が必要と考えている。

資料

国立国語研究所(2017)『日本語歴史コーパス』(Ver. 2017. 3 中納言 Ver. 2. 2. 2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

参考文献

山崎良幸(1966)『古典語の文法』193 武蔵野書院

薩摩順吉(1989)『確率・統計』60-63 岩波書店

鈴木泰(1999)『改訂版 古代日本語のテンス・アスペクト ―源氏物語の分析―』

金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子(2011)『シリーズ日本語史3 文法史』35-42 岩波書店

Kemmerer, David(2015) *Cognitive Neuroscience of Language*, 335-360 Psychology Press, New York

廉田浩(2017)「中世日本語の TA 体系変化と上代東国語の関連性」日本語学会 2017 年春季大会予稿集 17-24